

派生による名詞アングリシスモの形成と複数形

Anglicismos en español: Formación de los sustantivos derivados y el plural

広 康 好 美
Yoshimi HIROYASU

0. はじめに

近年、日本語でも外来語の氾濫が盛んに論じられているが、スペイン語でも同じ様な現象が見られる。アメリカ合衆国領であるプエルトリコのスペイン語には英語の影響が語彙面のみならず、統語面においても多く見られるし、イギリス領のジブラルタルではスペイン語の文法に従ってはいるが、英語の語彙を多く用いるピジン語が普通に話されている。このような極端な例を挙げるまでもなく、イベリア半島で話されているスペイン語も、15世紀のアラビア語の影響、18世紀のフランス語の影響に続き、19世紀以降は英語から多大な影響を受けてきた。いずれの場合も外国語の影響はほとんど語彙レベルにとどまっており、またそれらの語の多くはスペイン語の形態上の規則に合致しているため、外国語からの借用であることを意識されずに使われているものも多くある。

本稿ではイベリア半島のスペイン語のアングリシスモのうち、名詞の形成を分析し、さらにそれらの語の複数形についての最近の用法について考察してみたい。

1. アングリシスモの定義と分類

アングリシスモとは何かという問題は、研究者によってその定義がかなり異なっている。Alzugaray (1985) には2,400以上の外来語が集められており、54.2%がアングリシスモであるが、その大部分は英語の語がそのままの形で挙げられていて、外来語をスペイン語の語として扱う Alfaro (1970) や Pratt (1980) のリストとは対照的である。もともとなる言語である英語の中にラテン語系の語彙が多く、スペイン語と同じ起源を持つものも少なくないため、英語の、いわゆる「スペイン語化」は容易である。多くのアングリシスモはこのようにして作られ、それは英語の語をモデルに作られたスペイン語の新語であると考えることができる。

Pratt (1980) はアングリシスモを次のように定義している。

Un anglicismo es un elemento lingüístico, o grupo de los mismos, que se emplea en el castellano peninsular contemporáneo y que tiene como étimo inmediato un modelo inglés. (p. 115)

ここで使われる *étimo inmediato* は、新しい語が形成される時、直接のモデルとして使われる語のことであり、一方その語の起源となる語は、*étimo último* と呼ばれる。例えばアングリシスモ ‘coalición’ は元々はラテン語の ‘coalescere’ という語から来ており、この語が、*étimo último* であるが、スペイン語の ‘coalición’ は英語の ‘coalition’ が *étimo inmediato* で、そのモデルから作られている。

このモデルという概念でアングリシスモを解釈した時、その範囲は自ずから広がってくる。筆者はアングリシスモを以下のように分類した。

I) anglicismo propio (本来のアングリシスモ)

英語の語をモデルにして、スペイン語の中で作られた新語

- a) 英語の語がそのままの形で、あるいは形態的に何らかの修正を受けてスペイン語の語になったもの。
club, mítin, ranking, tren, tunel...
- b) 英語の語が形態素単位でスペイン語に翻訳されて作られた語。
supermercado, tocadiscos, televisión...
- c) 語を形成する形態素のうち一部が英語から来ているもの。

II) pseudoanglicismo (偽アングリシスモ)

英語の語をモデルにして、あるいはその形態素を使って作られた英語には存在しない新語。

- a) I) の語がさらにスペイン語の形態上の規則に従って派生したもの。
futbolista, goleada, gasolinera...
- b) 英語の形態素を使って作られた語。
autoestop, autopulman, futing...

III) anglicismo semántico (意味的アングリシスモ)⁽¹⁾

元々スペイン語にあった語が、英語の影響を受け、本来なかった意味を持つようになったもの。

canal (テレビのチャンネル) cadena (チェーン店) estrella (映画などのスター)

データはこれまでに出版された辞書や研究,⁽²⁾ 筆者がスペイン、マドリッド滞在中に耳にしたもの、広告、新聞などの中から代表的なものを挙げる。

2. 派生による名詞の形成

Stanley Whitley (1986) は英語とスペイン語がそのレキシコンの中に新しい語を作る方法として、1) derivation (派生) 語基に接辞を付ける場合、2) compounding (複合) 2つ以上の語基を組み合わせる場合、を挙げその中でスペイン語は他のロマンス語同様、接辞を豊富に持っており、英語は他のゲルマン系言語と同様に複合という手段に頼むところが多いと述べている。(p. 318) 筆者の集めたアングリシスモの中にも接辞を使った派生語が非常に多い。

2.1 anglicismo propio (本来のアングリシスモ)

2.1.1 英語の語が形態素単位でスペイン語に翻訳されて作られた語

上の分類で I) b) に属するものである。モデルとなる英語の語、スペイン語の新語ともに複合によるものと派生によるものがあるが、本稿では派生によるものに絞って考えたい。さらにこれは、1) 同源あるいは語形類似の形態に置き換えられたもの、2) 同源、語形類似ではないが意味の似ている形態素に翻訳されたものに分類される。ここでは 1) を calco, 2) を traducción と呼んで区別することにする。

以下に挙げるのは calco の例である。

antioxidante, autogiro, computador, detergente, devaluación, fotocopador, hipertensión, linotipo, linotipista, privacidad, programador, proyector, reactor, semiconductor, supermercado, televisión...

多くの語は英語のモデルと同じ綴りであるが、単語を形成する要素がすべて純粋にスペイン語の形態であるため当然スペイン語の規則にあった発音がされる。英語の影響は語そのものに表れるのではなく、多くの場合スベ

イン語に在存しなかった新しい概念が入って来た時、英語のモデルに従ってスペイン語の類似形態を使って新しい組合せの語を作ったことにある。例えば従来の小売店とは違った店の様式が導入された時 *supermercado* という語が作られた。(*supermárket* や *autoservicio* などのアングリシスモも使われる。) *reactor* は原子炉の意味であるが、語基 *actor* と *reactor* には意味的関連性はない。また英語には動詞 *react* が存在し、*reactor* はここから派生するが、スペイン語には同様の動詞は存在しない。

programador, *computador*, *fotocopiador* はいずれも ‘-er’ が ‘-dor’ に置き換えられた形である。いずれも女性形 ‘-dora’ も存在し、*computadora*, *fotocopiadora* は男性形、女性形意味の区別なく使われている。*computador* はフランス語からきた *ordenador* も広く使われている。

traducción の例としては次のような語が挙げられる。() 内はモデルの英語の語。

aditivo (*aditive*), *anticongelante* (*antifreeze*), *anticonceptivo* (*contraceptive*), *antideslizante* (*non-slip*), *autoservicio* (*selfservice*), *autodeterminación* (*selfdetermination*), *hidoavión*, (*hydroplane*), *superhombre* (*superman*)

スペイン語の接頭辞 ‘anti-’ は非常に造語力が高く、英語の接頭辞 ‘anti-’ 以外に、‘contra-’, ‘non-’, ‘un-’ などの接辞を翻訳するために使われる。またアングリシスモの中には同意の 2, 3 の語が共存する場合も少なくない。*superhombre* に対して、*supermán*, *hidroavión* に対して、*hidoplano* などの語や、また *Alfaro* は *anticongelante* と並んで *antifris* を挙げている。

calco, *traducción* とともに、*étimo último* はラテン語、ギリシャ語にあり、純粋なスペイン語の形態を使っているため狭い意味ではアングリシスモとみなされないことがある。

2.1.2 語を形成する形態素のうち一部が英語から来ている語

I) c) は、語基に英語、あるいはスペイン語化された英語が使われている語である。以下のような例がある。

antidumping (*antidumping*) *antifris* (*antifreeze*), *antitanque* (*antitank*), *antichoque* (*shock-proof*)
supermán (*superman*), *superstar* (*superstar*), *supersónico* (*supersonic*), *ultrasónico* (*ultrasonic*)...

dumping は ‘anti-’ のない形でも使われるアングリシスモである。*tanque*, *choque* はいずれもアングリシスモとして、*Real Academia* の辞書 (1974)³⁾ に取り上げられている。*supersónico*, *ultrasónico* は *sonido* という語があるために違和感はないがスペイン語に *sónico* という形容詞は存在しない。

2.2 pseudoanglicismo 偽アングリシスモ

ある語あるいは形態素がアングリシスモとしてスペイン語の中で定着するとその語がさらにスペイン語での派生によって新しい語を生み出すことがある。これは単語としては英語のモデルを持たないが、その構成要素の一部または全部の *étimo inmediato* が英語の語であるという意味で *pseudoanglicismo* と呼ぶことにする。⁴⁾

2.2.1 アングリシスモがスペイン語の形態上の規則に基づいて派生した語

これらの派生語の存在はその語がいかに深くスペイン語の中に根付いているかのバロメーターの一つにもなるであろう。

Antonio Quilis (1984) は291のアングリシスモについて、さまざまな年齢層の16人のインフォーマントにそれ

それぞれの語を使うか否かを尋ねたアンケート結果からなる統計的研究を行っている。その中ですべてのインフォーマントが「使う」と答えた第1グループに属する24のアングリシスモのうち、7語が何らかの形で派生したもので、あるいは他に派生した語を持つものである。反対に16人のうち1人だけが「使う」と答えた第5グループの語にはこのような例が非常に少ない。第1グループの中にはスポーツの名称である、boxeo, tenis, fútbol, béisbolが含まれている。この中で boxeo, tenis, fútbol は派生語を持つ。(派生語そのものの頻度はそれほど高くはないものもある) 反対に、スペインであまり一般化していないスポーツである béisbol は派生語を持たない。他にスポーツ名称の用語とその派生語には以下のような例がある。

名称	競技者	その他の名詞	名詞以外の派生語
boxeo	boxeador		boxear (v)
fútbol	futbolista	futbolín	futbolístico (a)
tenis	tenista		
golf	golfista		golfístico (a)
baloncesto	baloncestista		

ここで指摘しておかなければならないのは接尾辞 '-ador' を持つ boxeador には英語のモデルが存在するということである。その他の語は、競技者の名は、football player, tennis player といった形で表され、スペイン語では jugador de... の形も使われるがその他に接尾辞 '-ista' で派生される形が作られた。また baloncesto はこの traducción によるアングリシスモが一般的に使われその語がさらに派生した語が生まれた。接尾辞 '-ista' には本来形容詞及び名詞を派生させる機能があるが、ここでは名詞としての機能のみを持ち、形容詞としては他の接尾辞を使った語が派生している。

futbolín はサッカーゲームの機械を示す。スペイン語では縮小辞をつけて、もとの意味とは本質的に違った意味を表す名詞をつくる例(例えば pescado 一魚, pescadilla 一メルルーサの幼魚)があるがアングリシスモでこのような派生がなされるという現象は興味深い。

スペイン語の接尾辞 '-ismo', '-ista' は非常に造語力が高い。英語のモデルを持たないアングリシスモには次のような例がある。

esnobismo	esnobista	(esnob)
gangsterismo	gangsterista	(gángster)
clubismo		(club)
absentista		

esnobismo は「流行に振り回される」ことという意味で DRA (1984) に載っている、かなり一般化した語である。snobismo, snobista, snob の形もほとんどのアングリシスモの辞書に取り上げられている。英語には snob, snobby, snobbish という語はあるが、snobism, snobist という語はない。gángster も同様にスペイン語の中の派生語である。absentista は英語の absenteeism の calco から派生したものであろう。英語には absentee という語はない。

他に派生語の例として、

antibaby
boicot, boicoteo, boicotear (v)
gol, goleada

gasolina, gasolinera

などが挙げられる。また film のように、‘-ción’をつけて普通名詞から抽象名詞に派生したり、接頭辞をつけて、色々な形に派生した語もある。

film (filme), filmación, filmina, microfilm, microfilmación, filmar (v)

reporte に関しては、スペイン語に reportar という語が存在するが、本来は英語の持つ意味はなく意味的アングリシスモとして使われている。同じ語基を使い次のような語が派生している。

reportaje	(英) reportage
reportar	意味的アングリシスモ
reporte	(英) reporte
reportero	reporte の派生語
reporterismo	reporte の派生語

2.2.2 英語の形態素を使って作られた英語には存在しない語

アングリシスモは単語レベルのみならず形態素レベルにもおよび、それによって多くの偽アングリシスモが生み出される。英語の影響で高い造語力を持つようになった‘mini-’がその最も顕著な例である。‘mini-’という形態素はスペイン語に mínimo や minifundio という語が存在するために全く違和感はないが Real Academia (1975) はこれを接頭辞のリストの中には取り上げていない。Marcos Perez (1971) はこれは英語の minimum からきたものであるとし、Antonio Fernández (1970) の miniatrakara から来たものであるとする説を退けている。また Chriss Pratt (1980) は minifalda という語が一般的になり、それから他の語にも広がっていったのだとする。

‘mini-’の造語力は非常に大きくあらゆる物を表す名詞にそのものが小さいという意味でつけることできる。traducción であるアングリシスモ、minifalda の他に以下の様な例がある。

minibar, minibús, minicadro, minicadena, miniexcursión, minigira, minigolf, minilibro, miniservicio, minishorts,

興味深いのは、‘mini-’が単に何か小さいという意味だけでなく、その語基で表されるのとは違った物を表すこともあるということである。minicadena はスピーカーの分かれた小さなラジオカセットのことを指すし、minibar はホテルなどにある小型の冷蔵庫のことである。

日本語でジョギングと呼ばれる運動はスペイン語では jogging または fúting と呼ばれる。jogging は英語の jogging から作られ、fúting は英語の foot に英語の接尾辞‘-ing’をつけたものである。英語にも footing という語は存在するがスペイン語の持つ意味とは違っている。この‘-ing’という接尾辞を持つアングリシスモは非常に多く、Alzugaray の集めた約2,400のアングリシスモの中で、150もがこの接尾辞を持っている。その大部分は名詞で、語基となる動詞もアングリシスモとして使われている例は非常に少ない。また、‘-ing’そのもののスペイン語での造語力は低く、スペイン語の語基にこの接尾辞をつけたものは1例もみつからなかった。そのなかで、この非常によく使われている偽アングリシスモ存在は面白いと思う。

最後に接頭辞‘auto-’についてふれておきたい。‘auto-’はスペイン語の接頭辞として「自身の」「独自の」

という意味で多くの語に使われている。英語の影響を受けて作られた語の中に autoradio, autocrós, autopulman などの語があり、すべて ‘auto-’ に「自動車の」という意味を持たせている。特に英語の Pullman car (特別客車, G. M. Pullman の設計による) autopulman の場合は意味の核は ‘auto’ の方にある。このことから本来接頭辞であったはずの ‘auto-’ が語彙語として独立して機能するようになったと考えられる。ヒッチハイクを意味する autoestop も英語のモデルを持たない偽アングリシスモの1つである。

3. アングリシスモの複数形の形成

アングリシスモを形態的に分析するにあたり、名詞の屈折の問題を無視することはできない。アングリシスモの複数形の作り方に関しては、Emilio Lorenzo (1980) が ‘Un nuevo esquema de plural’ (新しい複数形の枠組み) の中で外来語一般について、本来のスペイン語の規則に合わない例を分析している。ここで問題になってくるのは先の分類による、I) a), c) の場合が主で, traducción や calco による語は、語を構成する要素が純粋なスペイン語であるためスペイン語の一般的規則に従っている。I) a) c) の語の中には語尾にスペイン語の名詞に一般的には現れない子音や子音グループが見られる場合が多い。

Real Academia (1975) はスペイン語の名詞語尾は、母音あるいは単独子音で、子音は /d, θ, s, n, l, r/ が大部分を占めており、その例外は非常に少ないが、近年の外国語からの借用語においてその他の子音も使われることがあると指摘している。

アングリシスモの複数形形成の傾向を分析するに際し、その語がスペイン語の形態的特質に合っているか否かという言語的要因の他に、その語がいかにスペイン語の中に根付いているかという、言語外的要因も無視することはできない。あまり一般的ではないアングリシスモの中には話し手によって複数形の作り方に揺れがみられるものも少なくない。また DRA (1984) にも載っていて、スペイン語の中に深く根付いている語ほど、スペイン語の規則に従って、子音で終わる語の場合 ‘-es’ がつけられる傾向がある。以下に挙げるアングリシスモについて幾人かのネイティブスピーカーにその用法を尋ねたところ、次のような結果が得られた。a) はスペイン語の一般的規則に従っている場合、b) はそうでない場合である。ただし、同じ語について、1つ以上の用法がある場合は両方に入れてあり、またそれら語はすべてに下線が引いてある。

1) 語尾が /d, θ, s, n, l, r/ のいずれかの単子音の場合

a) cupones, goles, mansiones, mítines, mocasines, líderes, sidecares, travelines, trenes, yogures.

búdines, cámpines, gansteres, párkines,

púdines, sloganes, suéteres

b) barmans, clowns,

búdins, lívins, los pudin,

gángsters, los gángster,

mánagers, los mánager, records, recors,

slogans, los suéter.

2) 語尾が 1) 以外の子音の場合

a) clubes, fílmes, álbumes, albunes, rosbifes,

faxes.

b) anoraks, bistecs, comics, los clines,

eslíp>s, slips, espóts, spots, esnóbs, snobs,

hándicaps, pubs (pabs), robóts,

sándwiches (sanwichis), los télex,
albums, clubs, films,
parkings, los páking,
rankings, los ránking, rosbifs,
tikets, los tíket.

3) 語尾が母音の場合

- a) antibeibis, bikinis, cadis, dandis, derbis,
hipis, hobis, intervius, kerosenos,
penaltis, sprais, videos.
champúes, clus, tisúes, tiques,
b) champús, tisús.

1) a) に挙げられた語は多く DRA (1984) にのっている語である。párquines, cámpines, mítines のように英語の接尾辞 *-ing* がつくものを基にして作られた語の中には語尾子音が欠落した例も多い。中でも DRA (1984) に 'g' が欠落した形で載せられている mítin, trávelin ではこの形が定着しているようである。一方 páking, cámping に関しては他の形で複数形を作る場合もある。cupones は単数形は cupón で、アクセントの一が英語の coupon [kju: pan] とは違っている。mansión, mocaśin, sidecar, yogur も同様でこのような語では '-es' を付ける形が定着している。

1) b) の語はスペイン語の中での定着度が低く、人によっては全く使われない語も含まれている。gángster は語中の 'g' は発音されないことが多く、また複数形は3通りの形 (gángsters, gángsteres, los gángster) ができた。英語の sweater は suéter と綴られ DRA (1984) にも載せられているが、スペインでは jersey の方が一般的に使われるため、用法にも揺れがみられる。スペイン語で普通に現れる子音語尾を持つ語は、一般にスペイン語の規則に従い、'-es' を付ける傾向が強いようである。ただし mánager のようにスペイン語にない子音 [dʒ] を語中に持つ語は '-es' は付けられない。

2) は語尾に普通のスペイン語にはない子音を持つ例である。筆者の集めた語の中で a) に入れられる語はすべて、用法に揺れがあり、-s のみをつけた形で使われることの方が多いようである。例外は étimo último がラテン語である álbum で Real Academia (1974) は álbum の複数形は álbumes であると規定している。またこの語は álbum という形で使われることもある。(p. 183) 興味深いのは、fax と telex でどちらも同じ 'x' で終わっているにもかかわらず、faxes は使われるが、telex は冠詞のみによって複数形を表すことである。fax が単音節語であるのに対して、telex が2音節語であることによる発音のしにくさのためもあるのだろう。またいずれの場合も複数形は避けられる傾向にあり、機械を表す場合、dos máquinas de fax (telex) のように表されることが多い。

't' で終わる語で '-es' をつけるものは筆者のリストにはなかった。'ts' は英語式に [tz] と発音される。かなり広く使われている tícket は語尾子音の欠落した、tique の形も用いられ、複数形は tiques である。

語尾が母音で終わる語はスペイン語の規則に従うものが多い。Real Academia (1975) はアクセントのある母音、特に '-á, -í, -ú' で終わる語は '-s' で複数形を作る場合、と '-es' で表す場合と2通りあると述べている。(例, bambús, bambúes) アングリシスモ, champús, champúes, tisús, tisúes にもこのような揺れが見られた。

複数形の規則が定着していない語の中には複数形を使う必要がある時それを避け、他の語を探す傾向も強い。

ranking が2つ以上ある時, listas de... のように言い替えたり, suspense は単数では使うが, 複数形では, las películas de suspense と言ったりする場合である。

以上のことからアングリシモの複数形の作り方には以下の方法のいずれかによるといえるが, その語の定着の度合によってこれからも変わって来るのではないだろうか。

- 1) スペイン語の一般的規則に従う。
- 2) 単子音で終わっている語に ‘-s’ を付ける。
- 3) 形は単数のままで, 限定詞の数によって複数形を表す。
- 4) 単数形ではその語を使っても複数形では他の語に言い替える。

4. 結論

一般にアングリシモというと, 「スペイン語の中で使われる英語の語」と解釈されることが多い。語彙語のシステムが閉鎖されたものでない限り, 科学技術, 経済の発展に伴い, 当然の現象として, 次々に新語が生まれる。しかしスペイン語のアングリシモは単なる「借用語」ではない。借用語という言葉に表されるように, 「借りてきた言葉」つまり, 英語の語をスペイン語の中で使っているのではなく, 英語の語をモデルにして作られた新語なのである。アングリシモがひとたびスペイン語の語の中に根付くと, 1つのアングリシモから次々に他の語が派生していく例が多くみられる。また, 元々スペイン語にある形態素が, 英語の影響でさらに高い造語力を持つようになることもある。その顕著な例が新しい接頭語, ‘mini-’ である。このようにして作られた多くの語は, 形態的にはスペイン語語本来の語と同じであるが, 一方, 翻訳という手段によらず英語の形態を持つ語は屈折の上で問題がおこることがある。アングリシモの複数形については, Real Academia (1975) も扱っているが, 一般の人々の用法では曖昧な点が多く残っている。

いずれにせよ外国語の影響が個々の単語の段階にとどまらず, さらに細かい単語の構成要素にも及んだとき, 新語が生まれる可能性がさらに広がって来るのである。

注

- (1) anglicismo semántico については Pratt (1980) p. 160 が詳しいリストを載せている他, 多くの研究者が取り扱っている。本稿は形態的分析を目的とするので, 形態上は純粋なスペイン語である, anglicismo semántico については扱わない。
- (2) Alfaro (1970), Alzugaray (1985), Lapesa (1963), Marcos Perez (1971), Pratt (1971, 1980), Quilis (1970), Rubio Sáez (1977), Stone (1957) 他。
- (3) Real Academia, ‘Diccionario de la Lengua Española’ の最新版。以降 DRA と略す。
- (4) Alfaro (1970) は pseudoanglicismo を次のように定義しているが, 本稿で扱うのは違った意味である。

Son ‘ciertas dicciones a las cuales se da en castellano uso menor frecuente que el que tienen en inglés sus congéneses o parónimos y por tal causa engendran la creencia o la duda de que son anglicismos, pero que son enteramente castizas.’

Bibliografía

- Alfaro, Ricardo, *Diccionario de anglicismos*, Madrid: Gredos, 1970.
Alzugaray, Juan José. *Diccionario de extranjerismos*, Madrid: Dossat, 1985.
Fernández García, Antonio. *Anglicismos en español (1891-1936)*. Oviedo: 1972.
Fonfrías, Ernesto Juan. *Anglicismos en el idioma español de Madrid*. San Juan Bautista de Puerto

- Rico; Club de la Prensa, 1968.
- Hiroyasu, Yoshimi. *Morfemas facultativos en los anglicismos del español peninsular*. Tokyo: Sophia University, 1989.
- Hiroyasu, Yoshimi. 'Morfemas facultativos en los anglicismos del español y productividad del lenguaje.' *Sophia Linguistica* 27 (1989): 137-149.
- Lapesa Rafael. 'La lengua desde hace cuarenta años' *Revista de Occidente* Tomo III octubre-diciembre (1963): 193-208.
- Lorenzo, Emilio. *El español de hoy, lengua en ebullición*. Madrid: Gredos, 1971.
- Marcos Pérez, Pedro-Jesús. *Los anglicismos en el ámbito periodístico: Algunos de los problemas que plantean*. Valladolid: Publicaciones del dept. de inglés, Univ. de Valladolid, 1971.
- Pratt, Chris. *El anglicismo en el español peninsular contemporáneo*. Madrid: Gredos, 1980.
- Pratt, Chris. 'El arraigo del anglicismo en el español de hoy.' *Filología Moderna* (1971): 67-92.
- Quilis, Antonio. 'Anglicismos en el español de Madrid' *Athlon Satvra Gramática in Honorem Francisci R. Adrados*. Vol. 1 (1984) 413-422.
- Real Academia Española. *Diccionario de la Lengua Española*, Madrid: Espasa-Calpe, 1984.
- Real Academia Española. *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*. Espasa-Calpe. Madrid. 1975.
- Rubio Sáez, José. *Presencia del inglés en la lengua española*. Valencia: Ezcurra, 1977.
- Stanley Whitley, M. *Spanish English Contrasts. A Course in Spanish Linguistics*. Washington, D. C. Georgetown University Press, 1986.
- Stone, Howard. 'Los anglicismos en España y su papel en la lengua oral' *Revista de filología española* Tomo XLI (1957): 141-160.